

2017年(平成29年)6月26日

病院長からの一言

～病院長2年目の目標～

弘前大学医学部
附属病院長 福田 眞作

病院長を拝命して、2年目になりました。1年目の経験を糧に、2年目の病院長職を務めて参ります。

私の今年度の大きな目標は、3つあります。1点目は、附属病院の再開発の方向性を明確にすることです。これが附属病院長2年目の最大のミッションと考えています。ご存じのように、藤前病院長を中心に策定された再開発計画は、根本からの見直しを余儀なくされています。病棟改修を目的に策定された前回の計画案では、将来の中央診療棟、外来診療棟、高度救命救急センター他の改修を見据えたものとなっていないとの文部科学省からの指摘をうけ、根本から見直すことを決定しました。

将来(20年-30年後)を見据えた再開発計画が求められているわけですが、病院敷地内限定では「史跡」や建築基準の問題等、様々な障壁を打破することは極めて困難な状況にあります。従来の発想にない再開発構想が必要であると考えています。関係する部署のご意見を伺いながら、私の最大のミッションを達成したいと思えます。2点目は病院機能のさらなる充実です。昨年度に引き続き病院内の古くなった医療機器を更新すること、そして大学病院が備えるべき新規医療技術の導入(ハイブリッド手術室など)を実現したいと思えます。地方にあっても最先端の高度な医療を患者さんに提

供することが、県内唯一の特定機能病院である本院の使命と考えています。3点目は、職員のモチベーションが向上するようなインセンティブを提供したいと考えています。この春すでに実施したも

のもありますが、職員の貢献度を収益面にこだわらず様々な方面から評価するというものです。その結果として、職員のモチベーションが向上し、安全な医療の提供と安定した病院経営が実現するもの

と信じています。何か良いアイデアがありましたら、(こっそりと)教えてください。

今年も職員の皆さんと一緒に頑張る参ります。ご協力、引き続き宜しくお願いいたします。

新任科長の自己紹介

循環器内科科長 腎臓内科科長 富田 泰史



平成29年3月1日付で、循環器内科科長、腎臓内科科長を拝命いたしました。就任にあたり自己紹介を兼ねてご挨拶を申し上げます。

私は地元弘前市出身で、弘前高校を経て、東北大学工学部(環境保全工学)へ進学しました。同大学を卒業後、医学の道を志し、平成4年に弘前大学医学部へ入学しました。当時は学士編入学制度がなく、一般受験での入学でした。医学部6年生の時に、内科学、特に論旨明快でダイナミックな学問である循環器病学に惹かれ、先代奥村謙教授の門を叩きました。現在のような卒後臨床研修制度はありませんでしたが、優れた内科医を育成すべく内科学教室全体(第一内科、第二内科、第三内科)での研修制度があり、総合的な内科医としての素養が身に付いた充実

した3年間でした。まさにこれから始まろうとしている新内科専門医制度を先取りした内容の研修でした。その後は、学位取得、海外留学(米国ノースカロライナ大学チャペルヒル校)を経て、現在に至っております。

循環器内科では、奥村前教授ならびに諸先輩方が築き上げてこられた循環器救急医療システムを通じて、青森県内および秋田県北地域に安心・安全な循環器医療を提供することが責務です。さらに関連する寄附講座とともに、最先端の循環器診療を積極的に展開していきたいと思えます。心臓弁膜症などの構造的疾患に対する新たな最先端カテーテル治療や補助人工心臓などの高度医療の実践に際しては、心臓外科医や看護師、臨床工学士、臨床検査技師などの多職種による「ハートチーム」を構成

するとともに、2年後の平成31年度に予定されている青森県初のハイブリッド手術室稼働に向け、全力を尽くします。

腎臓内科では、急増する慢性腎臓病患者さんや透析医療に対応するため、「尿蛋白から腎移植まで」切れ目のない医療を展開していきます。積極的に腎生検を行い、診断し、早期の治療介入により慢性腎不全への進展を防ぐことが肝要です。さらに腎移植においては、本院泌尿器科ならびに関連各科、関連機関と緊密に連携し、術前術後管理をより一層充実させ、腎移植医療のさらなる発展を目指します。

今後も、最新医療を提供し、地域医療の充実に邁進いたしますので、皆様方のご指導ならびにご鞭撻をよろしく願ひ申し上げます。

各診療科等の紹介

【内分泌内科】

内分泌内科、糖尿病代謝内科は、スタッフと医員21名で主に内分泌疾患・糖尿病・脂質異常症・膵臓疾患の診療を行っており、内分泌グループは現在スタッフ5名、医員3名で診療に当たっています(他に関連病院に3名、留学生2名)。

内分泌内科は、一般の診療科が臓器別に分類されているのに対し、対象の臓器が多岐に渡っていることが特徴です。視床下部-下垂体、甲状腺、副甲状腺、膵臓、副腎、性腺など広い範囲に渡っています。診断と薬物治療は当科が行い、外科的治療が必要な時は、甲状腺外科、泌尿器科、脳神経外科、消化器外科と協力して治療を進めています。

外来で最も多いのは甲状腺疾患で、他院・他科から多く患者を紹介していただき(昨年度は約200名)、バセドウ病、橋本病、甲状腺腫瘍などを診察しています。甲状腺超音波検査を施行し、腫瘍に対しては超音波下で穿刺吸引細胞診を施行して、甲状腺癌の診断に役立てています。妊娠中の甲状腺機能が注目されて妊娠に関する紹介が増え、また免疫チェックポイント



阻害剤の副作用としての甲状腺機能異常の紹介が増えていることが、最近の傾向です。

近年、二次性高血圧の原因として最も多いことが明らかになって来た副腎疾患である原発性アルドステロン症の紹介が増加し、昨年度は50余名の紹介があり、入院精査を行いました。

当科の特徴的な検査としては、ホルモン負荷試験が挙げられます。ホルモン剤等の薬剤を投与して、血中の様々なホルモン値の時間変化をみる検査で、内分泌疾患の診断には不可欠な検査です。主に入院で施行されますが、簡便なものは外来でも施行しております。また、前出のアルドステロン症などに対して放射線科と共同で静脈血サンプリング法という、臓

器の静脈から直接血液を採取して局在診断を行う特殊な検査も行っております。

当グループは旧第三内科時代からの伝統で、特に視床下部-下垂体-副腎系を得意分野としており、厚生労働省「間脳下垂体機能障害に関する調査研究」班会議に参加して、クッシング病の診断基準作成等の成果を上げております。この分野では、他に汎下垂体機能低下症、中枢性尿崩症、先端巨大症、プロラクチノーマ等の疾患を診療しています。

専門性の高い、高度な医療を提供できるよう、メンバー全員で努力して参りますので、これからもどうぞ宜しくお願いします。

(内分泌代謝内科学講座 照井 健)

新任部長の自己紹介

医療技術部長 須崎 勝正



このたび、平成29年4月1日付で医療技術部長を拝命いたしました須崎勝正と申します。自己紹介を兼ねてご挨拶させていただきます。

私の生まれた所は、作家の太宰治を輩出した北津軽郡金木町(現在は五所川原市金木町)という片田舎です。今でこそ演歌歌手の吉幾三の出身地として有名になりましたが…吉の歌の通り何も無いところです。

五所川原高校を卒業後、弘前大学医療技術短期大学部診療放射線学科1回生として入学、昭和55年3月に卒業し、そのまま附属病院放射線部に診療放射線技師として勤務になりました。次の年、八戸市にあります青森労災病院に異動し、昭和57年4月から当病院に戻り、今に至っております。最初の10年間位は一般撮影を中心に仕事をしていました。その後、RI以外を一通り回らせていただき、平成11年からは本格的に治療に携わりました。放射線治療部門では放射線治療装置の更新に2度携わることができました。平成15年に他病院での過剰照射が起

きたことにより、放射線治療の技師に専門性が必要とされ、放射線治療専門技師や放射線治療品質管理士制度ができ、高精度放射線治療が求められる変革の時期を経験しました。平成27年4月1日に診療放射線技師長となり、現在は、医療画像統合診断支援システムの更新に着手しています。

医療技術部は、設立されてからまだ4年しか経っていない新しい部です。検査部門、放射線部門、リハビリテーション部門、臨床工学部門の4部門からなり、少数職種も含めたメディカルスタッフ138名が所属する大きな組織になりました。専門の違う職種が補い合いながら、関係する診療科をはじめ関係各位の信頼に足る専門職として協働できるよう、医療技術部長として運営して参りたいと考えております。定年まで残り2年、ご期待に沿えるよう頑張りたいと思えます。皆様におかれましては、これまで以上にご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

先日、中国上海で開催された国際学会に参加してきました。上海は現在、首都北京を凌ぐ中国最大の都市で、世界都市格付けにおいては、最高峰のロンドン、ニューヨークの2都市に次ぎ、パリ、東京とともに「アルファ+」級世界都市に選定されています。海外からも多くの企業が進出し、日本人だけでも45,000人以上が在住しているとのこと。

このような国際都市ですので、もちろん英語が通用するものだと気軽に思っていました。実はそうでもありませんでした。街中

で英語はほとんど通じず、タクシーの運転手で英語が分かる人は皆無でした。我々をさらに困らせたのは、ホテル名が英語と中国語表記で全く異なるということでした。弘前ならドリーミーイン・弘前は英語でDormy Inn Hirosakiとなるでしょう。タクシーの運転手も大体理解してくれると思えます。しかし、中国ではMarriott Hotel Shanghaiが上海雅居樂万豪酒店という感じです。漢字が分かる我々でも大変ですので、漢字を母国語に持たない外国人はもっと大変だったと思えます。

先憂後楽

言葉の壁



病院長補佐 石橋 恭之

地方都市に位置する弘前大学医学部附属病院に、外国人の方が受診することは滅多にありません。しかし、時に外国人の診療を依頼されることもあります。ご存じのように附属病院には、案内板にもエレベーターにも外国語表記はありません。伺ったことはありませんが、外国からきた患者さん達は、どう感じていたのでしょうか？

言葉の壁は、日本人同士である我々医師と患者さんとの間にも存在します。時間をかけて治療法を説明したにもかかわらず、患者さんから最後に「良く分かりませ

が、先生にお任せします」と言われたりもします。日本には医師と患者間のパターンリズムがまだ根強く残っているのかもしれませんが、患者さんの様々な背景を考えながら、分かり易い説明を心がけなければなりません。

さて院内では、日本語の表示が分かるにもかかわらず、検査や病棟の場所が分からずに困っている患者さんをよく見かけます。その様な時、我々病院スタッフは優しく声をかけてあげたいものです。

平成29年度体制スタート!

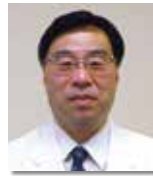
昨年度に引き続き副病院長に小児科学講座 伊藤悦朗教授, 泌尿器科学講座 大山力教授, 病院長補佐に総合診療医学講座 加藤博之教授, 内分泌代謝内科学講座 大門眞教授, 整形外科科学講座 石橋恭之教授, 看護部 小林朱実看護部長が就任しました。



副病院長
伊藤 悦朗
小児科学講座
教授



副病院長
大山 力
泌尿器科学講座
教授



病院長補佐
加藤 博之
総合診療医学講座
教授



病院長補佐
大門 眞
内分泌代謝内科学講座
教授



病院長補佐
石橋 恭之
整形外科科学講座
教授



病院長補佐
小林 朱実
看護部長

国立大学病院海外実務研修に参加して



平成28年度国立大学病院海外実務研修が「外国人患者等の受入体制の整備状況及び各職種間における連携体制の調査」をテーマとして、平成29年2月20日から6日間の日程で開催されました。団長の医師をはじめ、薬剤師、看護師、臨床工学技士、臨床検査技師、放射線技師、事務職員、栄養士のメンバーで、台湾の最先端の医療を担う病院である、林口長庚記念病院、台安医院、国立成功大学附設医院、高雄医学大学、そして医療通訳を養成している輔仁大学外国語文學院を見学しました。各病院・施設では歓迎挨拶があり、担当スタッフから病院・施設についての基本情報や保険制度等

のプレゼンテーションを受けた後、われわれからの質問に担当のスタッフが答える形で進行されました。その後、国際医療センターを中心に病院・施設を見学し、多くの知見を得ました。今回見学した病院・施設はいずれも最先端の医療情報システムと、豪華な設備を有しており、スタッフのモチベーションの高さや、卓越したボランティア精神、人道的支援への熱意なども目の当たりにし、日本では経験のない光景に絶句しました。また、見学した病院・施設はそれぞれに特化した分野を持ち合わせており、関連分野に影響を及ぼすような先端技術や設備、精神(哲学)を競い合っ

ているようでした。研修が進む中で台湾の歴史的背景や文化、国民性等も知ることができ、見学で目の当たりにした様相を理解することができました。世界平和にも外国人患者さんの受入れにも職種間の連携にも、相互理解が肝要だと感じました。また、今回の海外実務研修が多職種で開催されたことが非常に有意義でした。専門職ならではの視点で物事の考察や発言がなされ、自分にはない気づきを促してくれました。今回の研修では外国人患者さんを受入れるための実用的な技術、知識、手法や各職種間における連携について把握することができたため、是非今後の業務に活かしていきたいと思っています。

(栄養管理部 栄養士 三上恵理)

遺伝カウンセリング部門設置

平成29年4月1日、本院、総合患者支援センター内に遺伝カウンセリング部門を設置しました。私を含め本院にいる臨床遺伝医学専門医4名が中心となり、各講座より推薦いただいた担当医、看護師1名、事務職員1名と共に進めます。

遺伝子解析技術が進み、種々の疾患を対象に遺伝型解析が行われ、それに基づいた医療も盛んに行われるようになってきました。遺伝医療という新たな分野が急速に進んでおりですが、それについての医療現場の認識は、時に不十分です。遺伝情報を診療に利用するというハード面での対応は十分かもしれませんが、遺伝型は家系内で共有する、子孫に受け継がれる、従って、それに付随した問題

は個人の範囲に止まらない、等、遺伝に関わる情報をクライアントにどの様に伝えるか?それに伴う悩み心配事にどの様に寄り添うのか?ソフト面での対応は、実臨床では難しい事が多いと思います。ソフト面で、少しでもお役に立てればと思います。

また、昨今、遺伝カウンセリングの重要性が強調され、遺伝医療の基本要件として、遺伝カウンセリング部門が求められるようになってきました。すなわち、本部門が無いと遺伝子解析を含む臨床試験に参加できない、癌遺伝医療拠点病院として認められないという事態も生じるかもしれません。遺伝性疾患は希少というイメージがあるかもしれませんが、遺伝性疾患の理解の高まり、解析技術の向上に伴い、想定を超えて遺伝性疾患が診断されてきています。また、遺伝性腫瘍(乳癌、卵巣癌、内分泌腫瘍、等)も高頻度にあり、患者さんを超えて家系全体での大きな問題となってきます。アンジェリーナ・ジョリーさんが、予防的に乳房を切除した事が話題になりましたが、家系内の発症していない人達にも、カウンセリングが必要で

これからの経験を積み重ね皆様方のお役に立てる様になりたいと思っておりますので、ご理解とご支援を賜りたくお願い申し上げます。(総合患者支援センター長 大門 眞)



第10回 弘大病院がん診療市民公開講座を開催

昨年12月4日、弘前市民会館大会議室にて、第10回弘大病院がん診療市民公開講座が開催されました。今回はがんに関するリハビリテーションと婦人科がんについての2題の講演があり、大変多

くの市民の皆様にご参加いただきました。

まず、リハビリテーション科科長津田英一先生の「もっと知ってほしい!がんのリハビリテーション」では、がん治療におけるリハビリテーションの役割は、自分らしい日常生活を送ることが出来るようになるものである、とのお話がありました。また、がんに罹るとその時々によって様々な障害が起こることから、各がん種によって生じうる症状とその対応についても紹介があり、より具体的に知ることができました。

産科婦人科科長横山良仁先生からは「婦人科がんの話」として、子宮頸がん、子宮体がん、卵巣が



んについて、それぞれ原因となる要因や、予防法、治療法などについてご説明頂きました。ウイルスや肥満、糖尿病が要因となることもあるため、予防ワクチンや食生活の見直し、運動するなどの予防と、早期で発見するために検診が非常に重要であると語られました。また、がんになった時に行う治療についてもお話いただき、手術や抗がん剤治療など、治療の流れがよくわかる内容でした。

その後の質疑応答でも10名以上の方から質問があり、先生方も真摯にお答え下さいました。3時間近い時間ではありましたが、多くの方々最後まで聴講しており、市民の皆様が、がんに関心を持っていると改めて知ることができました。今年度も開催する予定ですので、今回お越しくくださった皆様も、残念ながら機会を逃してしまった皆様も、ぜひご参加下さい。(がん相談支援センター)

平成28年度ベスト研修医賞選考会開催

平成28年度弘前大学医学部附属病院ベスト研修医賞選考会が、平成29年2月22日に、医学研究科臨床小講義室で開催されました。本賞は平成16年度の卒業臨床研修必修化に合わせて創設された賞であり、今回で13回目を迎えます。当日は、あらかじめ卒業臨床研修センター運営委員会により優秀研修医に選ばれた、北山和敬先生、白鳥俊博先生、奈川大輝先生(五十首順)の3名の研修医が、「ここがポイント!研修医の心がけ」と題し、自分が研修生活の中で重視してきた事柄について、一人8分間ずつスピーチを行ないました。聴衆は学生および教職員で、スピーチのあと参加した学生諸君による投票が行われました。投票の結果、白鳥俊博先生が平成28年度ベスト研修医に選ばれました。引き続き表彰式が行われ、白鳥先生に賞状、純銀製メダル、記念品が、北山先生、奈川先生には優秀研修医賞として賞状、楯、記念品が贈られました。その他にも各種特別賞として、松原侑里先生に「ベストパートナー賞」、小川薫先生に「レポート大賞」、白鳥先生と奈川先生に「セミナー賞」、緑川陽子先生に「グッドレスポンス賞」が贈られました。つづいて懇親会に移り、5年生から恒例となった「ベスト指導医賞」の発表が本年も行われ、会場は大いに盛り上がりました。当日は47名の学生諸君に加え教職員も含め総勢70名以上の参加があ

り、教職員、研修医、学生がみな、この1年の研修や臨床実習の思い出について心ゆくまで語り合い盛会裏に終了しました。医師は「人と人との絆」の中でしか育ちませんが、本賞がこれからも、研修医・教職員・学生の絆を強める役割を果たしてくれることを期待し



福田病院長と共に、ベスト研修医賞、優秀研修医賞の先生方。

ています。(卒業臨床研修センター長 加藤博之)

看護の日 ~いのちに寄り添うプロフェッショナルとして~

5月12日は「看護の日」です。近代看護を築いたフローレンス・ナイチンゲールの誕生日にちなみ制定されました。今年は5月7日から5月13日までを看護週間として、「いのちに寄り添うプロフェッショナルとして」をメインテーマに、どなたでも看護に触れていただける行事が全国で行われました。看護部では、中央待合ホールに「スマイルガーデン」と

いうテーマで「看護の日のお花」を展示しました。

病棟では5月12日に患者さんへメッセージカードをお渡ししました。看護師のメッセージとともに、患者さんのこころの花も満開にしたいとの想いで、看護師は一人ひとりの患者さんにメッセージを考えました。外国の患者さんに対しては、自分の気持ちを伝えようと、両国の国旗を描き工夫を凝らしていました。いのちに寄り添うプロフェッショナルとしての想いは国境を越えていると感じさせられました。

今は感染対策の観点から病室に生花を飾る事は遠慮していただいております。看護の日だけは、お花で気持ちを豊かにできるひと時と感じています。入院中の患者さんは治療上安静が必



要なため、待合ホールに行けない患者さんもおたくさんあります。今年はタブレットで写真を撮り、患者さんにお見せしました。皆様、写真に興味を持ち喜んでくださいました。これからも、看護部の理念である「やさしさと思いやり」を持ち、行き届いた看護を提供していきたいと思っています。

(第一病棟8階 二階千津子)

【編集後記】

南塘だより第86号をお届けいたします。ご多忙の中、原稿をお寄せいただきました皆様へ心より感謝申し上げます。

平成29年度に弘大病院の専門医研修プログラムに加わった医師数が59名と過去10年で最多となりました。昨年度は43名でしたので、16名も増加したことになります。この増加の最大の要因は、地域定着枠の学生数の増加と思われる。

平成16年4月から新臨床研修制度が必修化され、本院で研修を行う若手医師は初期も後期の大幅に減少しました。平成20年度には、後期研修医数が25名まで減少しました。その後少し増加が見られましたが足踏み状態でしたので、今回の結果は弘大病院にとって大きな朗報になったと考えられます。(広報委員会委員長 伊藤悦朗)